鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 23 年 9 月 2 日）

泰伯　第八

7　曾子曰く、士は以って弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し。仁以て己が任と為す。亦　重からずや。死して後に已む、亦　遠からずや。

「士」というのは日本では武士のような階級、下の方の貴族です。また一般市民が能力を身につけ、その特殊な能力によって上流階級に一歩近づいてきた。特殊な位置が出来つつある。そういった人達を「士」と呼んでいたと考えて下さい。

弘毅は、心が広く力が強くて決断力があるという意味です。

よく弘毅と云う名前の人がいます。弘は心が広い。毅は豪胆だし決断力があるし、肉体的には腕力がある。この間テレビを見た時に、金メダルを取ったハンマー投の室伏選手の試合を見た時に、その筋肉ムキムキのイメージが重なりました。と云う事で弘毅は、心が広くて、腕力があり、決断力がある人間だと云う事です。

任重くして道遠し。

任務が重い、それは遠い道を行くようなものだ。徳川家康が遺訓として残したと云われているもので、＜人は重たい荷物を背負って、坂道を登るようなものだ＞も、実は徳川家康にハクをつけるために後世の人間が作って、流布させたそうです。でも徳川家康のイメージにぴったりだなと思います。あの文章は、ここから出ているようです。

仁以て己が任と為す。亦　重からずや。

仁徳の完成を以て、自分自身を完成とする。

死して後に已む。亦　遠からずや。

死ぬまで努力をし、死んで始めて努力が終わる。この道も遠いなといえる。

8　子曰く、詩に興り、礼に立ち、楽に成る。

孔子が言うには、詩を詠んで（歌って）興奮する。

礼楽は礼式を習って、確かな社会的立場を確立する。

音楽を聞いて人間としての教養を完成させる。因みに澁澤栄一さんは、この時代の中

国の音楽を身につけると云うのは、音楽を静かに真剣に聞いて、自分の血肉とし、教養を身につけると云う事になる。したがって、この頃の音楽は素晴らしいものがあった。しかるに今の日本（明治時代の日本）は、俗謡であるとか、民謡であるとか、とても学問としての体系が確立しているものとはいえない。この時代の中国の音楽は、学問として体系が確立しているから、音楽を聞き自分のものにすることで、人間としの教養を深めるということが出来る。

９　子曰く、民は之に由らしむべし。之を知らしむべからず。

今度、総理大臣になった野田さんに、どじょう宰相というイメージが出てきました。

色々な話が流れていますが、＜輿石さんが幹事長になって下さいね＞というメッセージを送る意味で、一ヶ月前から焦点を絞って、あいだみつおさんの本を贈り＜どじょうの話＞をし、それによって攻めようという事をやっていたようです。因みに前原さんも自分が総理大臣になったら、輿石さんを幹事長に引っ張り出そうと思っていたようです。どうも二人で相談していたのではないかと云う様な気配があるようです。

そういう色々な動きを国民が見て、あの人のパフォーマンスが凄いなと思うか、なかなか清廉潔白であの人の云う事は、信じてみて良いのではと思うか、どちらになるかですけれど、これは「民は由らしむべし」の実例になります。

何となく信用できるから、野田さんの近くにいってみようか、テレビで野田さんが出たら、良く話を聞いてみようかというのが、「之に由らしむべし」と云う訳です。

「之を知らしむべし」は、知らしめる事は困難であり、とても難しい。

野田さんの腹の中にあるものを国民の立場で推察するのは、難しい。どうも野田さんが喋っている言葉の奥には、いくつもいくつも思いが込められている様なので、真意を知る事は難しい。

これがそのまま今風の言葉に訳していけば、野田首相の真意は解らないけれど、フーテンの寅さんの様な雰囲氣で話をすれば、増税は困ったものだけれども、何となく誠実実に溢れているから、何となく信用できそうだな。だから後についていってみようかな。と云うのが、「由らしむべし」と云う風に解釈なさると良いでしょう。

１０　子曰く、勇を好んで貧しきを疾ときは乱る。人にして不仁なる、之を疾むこと已甚だしきときは乱る。

孔子が言うには、小さな勇気を好む人は、決起も小勇です。

そういう勇気を持っている人が、自分自身が貧乏、周りの人達も貧乏である。そういう状況を憎むと、大概反乱を起こすものだ。
大塩平八郎の乱は、そこら辺が良く似ていると思います。

人(ひと)にして不仁(ふじん)なる

人道に背いている人。大塩平八朗の上司がそういう人物で、大塩平八郎がその人物を憎む事が甚だしい。非常に憎んだ。そして豪商の行為にも腹をたてていました。これは大塩平八郎自身も何かしなければと思い、自分が持っている財産である、書物を売り払って庶民に分けたけれども、焼け石に水状態で、とても足りない。これは、幕藩体制に対して乱を起こすべきだという思いに到って、乱を起こしたと云う事です。
小さい勇気を持っている人間は、世の中に対して非常に腹を立てたという時は、だいたい反乱を起こすものだ。
明治維新の遠因になった、いちばん最初のきっかけは大塩平八郎の乱だったと云われています。

勇(ゆう)を好(この)んで貧(まず)しきを疾(にく)むときは乱(みだ)る

各国、各政府でも、会社の中でみても、現在はイギリスや、ヨーロッパで大学を出たが、勤められない状況にある。これは世界各国が乱れ始めている証拠だと感じています。今の世の中の乱れは＜勇を好んで貧しきを疾むときは乱る＞に直結している感じがします。